17

やはり、警察官が絡んでいた。ノンキャリア警部補ではなく、警部だったが、彼が警察署の証拠品倉庫から持ち出した覚醒剤をひょんなことで知り合ったヤクザ組織のU組に横流しをしていたのだ。そのU組は構成員三十名ほどの博徒系暴力団で広域暴力団S会の傘下にあった。ただ、S会が表向きは禁止している覚醒剤の密売をしていた。覚醒剤を扱う危険性を考えれば、組をつぶしかねないという組幹部の声もあったが、小さい組織がゆえに、組として必要なシノギであることも事実だった。実際、バブル景気の当時、覚醒剤密売は格別に収益率が高い「事業」だったのである。

数年前、M警部率いる班が覚醒剤取締法違反と銃刀砲違反などの容疑でU組の事務所をガサ入れした。その場で対応したH組長とM警部は、以前から警察署で暴力団と警察官という関係で何回か対峙していた。結局、そのときは白い粉も何も出なかった。M警部の失態だった。しかし、H組長は何を思ったのか、少量の覚醒剤を持たせた手下を次の日、自首させた。それで、M警部の面目はなんとか保たれたようだったが、大勢の警察官を動員した成果としては小さすぎた。

さらにその後、警部が指揮した事件で逮捕者が不起訴となったりして、警察署内ではずさんな捜査を批判する声が上がっていた。前から評判のよくなかったことも重なって、M警部は苦しい立場に置かれていた。ついに、閑職に追いやられ、そこで彼の出世街道はどん詰まりとなった。

あるとき、M警部は証拠品倉庫から末端価格にすると約三億円といわれる覚醒剤を盗み出した。ほとんど発作的でやけくその行動だった。警部はその数キロの覚醒剤を自宅に保管したが、いつまでもそこに置いておくことはできない。さて、どうする？

そのとき、ふっと思い出したのがH組長だった。U組ならこいつをきっとほしがるだろう。H組長なら面識もあるし、二、三度話したこともある。話をつければ三千万円くらいで売れるかもしれない。

警部は盗聴の恐れも考えて、組長には電話ではなく、あえて宅配便を送った。中には、白い粉の入ったビニールの小袋が三つとH組長に宛てた手紙のようなものが入っていた。それには電話番号と次のようなことが書かれていた。「話がしたい。そちらには悪くない話だ。×日の午後六時に、ここに電話をくれ。ただし公衆電話からかけてくれ。M」

警部は午後六時にとある喫茶店にいた。そこはいつも客がいっぱいで騒がしかった。一分ほど過ぎたときに電話が鳴った。警部はすばやく受話器を取った。

「Mさんかね」。H組長の声がした。

「そうだ。公衆電話からだな」

「もちろんだ。それで、悪くない話ってなんだ？　ビニール袋に入っていた小麦粉のこと

か？」
「そうだ。白いブツだ。そっちが売れば三億はかたい」
「そりゃけっこうな話だな。しかし……」
「なんだ？」
「警察のエライさんのあんたを疑うわけじゃないが、まさかおとり捜査なんてことはねえよな」
「おいおい、それは大丈夫だ。俺を信用してくれ」
「信用したいのはやまやまだけれど、あんた警部だろう？　警部といえばエリートだ。そのエリートがなんでこんなやばい話をもってくるんだ？」
「俺はいまや窓際よ。いろいろあってな」
「ふーん、そんな個人的なことはどうでもいい。とにかく、うちの組にとっちゃその話がやばいかやばくないかが問題なんだよ」
「出所は言えんが、ブツは上物だぞ」とM警部。
「上物なんてことじゃくて、うちにとって百パーセント安全な取引かってことよ。じゃないと組が吹っ飛んじゃう」
「もちろん、絶対安全な取引だ。俺の命をかけてもいい」
「あんたの命をとったって一文の値打ちもないよ。保証だよ。保証金一億円を積めったって無理だろうし。そうだなあ。あんたの拳銃を担保に預けてもらうってのはどうだ。そうすれば一蓮托生だ」
「拳銃は無理だなあ。管理が厳しんだ。何か別の……」
「もし、これがおとり捜査ならあんたの手柄だ。だけど、こっちはどうなる？　任侠の世界ではお笑い者よ。お人好しの間抜けで大バカ野郎ってな。そのあげくバラされちゃうのがオチだ」
「うーん、ここでこれ以上話し続けても……どうだろう、明日もう一回電話をくれないか。その保証ってやつをお互いに考えようじゃないか。ただ、俺が言えることは、この取引がお互いの利益になるってことだ」とM警部が力を込めて言った。
　次の日、同じ喫茶店でM警部はH組長と再び電話会談を行った。
「どうだろう、俺の警察手帳を預けるってのは？　警察手帳は警官にとって大事なものだぞ」
「警察手帳なんてただの手帳だろ？」
「いや、そうじゃない。俺の署名があって、他にいろいろなことが書かれてる。やばいこともな。警部の警察手帳なんだから貴重なものさ。売ったらけっこうな値が付くさ。まあ、買う者がいたらだけど。あっ、他の者に見せるなよ。取引後にはすぐに返してもらうからな」
「うーん、拳銃と比べると担保としては弱いな」
「じゃあ、付録と言ってはなんだけど、組関係の警察情報を教えよう。あんたたちにとってこれこそ貴重なもんだぞ」とM警部が付け足したのだった。

「わかった。だがすこし時間がほしい」
H組長は迷っていたが、だいぶ乗り気になってきたようだとM警部は感じた。そして一週間がたった。
「どうだ、三千万で」とM警部が取引の金額を初めて提示した。
「ちょっと高いんじゃねえか」
「売値の十分の一だぞ」
「その値段だったら他からも買えるぜ」
「いいブツだぞ」
「いくらいいブツでも、払えんな。その半分なら買おう」
「そりゃ無茶だ」
その日には取引不成立となったが、後日、連絡をし合った結果、二千万円で手を打つことになった。取引は二段階となった。まず、人目のつかない場所で覚醒剤の三分の一を渡す。ただし、接触を避けるため直接ではなく、M警部が指定する場所に覚醒剤の入った箱を置く。それを双眼鏡で見張っていた者がすばやく回収する。そして、その覚醒剤が確かなブツとわかった時点で手付金五百万円をM警部に振り込む。次に、宅配便で残りの三分の二の覚醒剤をU組が指定するところに送る。その後、一千五百万円が警部に振り込まれる。ここで、取引が終了となる。
※一九九〇年当時、日本全国の暴力団の構成員は八万八〇〇〇人だった。最多の人数だった一九六三年の一八万四〇〇〇人には比ぶべくもないが、バブル崩壊の一年前ということもあり、景気もよく、暴力団の勢力は力強いものがあった。それが、バブル景気がはじけたあとの一九九二年三月に暴対法（暴力団員による不当な行為の防止等に関する法律）が施行されたことにより減少が顕著となる（二〇二二年末には二万二四〇〇人と最少）。覚醒剤についていえば、アメリカなどよりも収益率が高いこともあって、一九九〇年当時の暴力団の収入の約三分の一がそれの密売によるといわれている。なお、覚醒剤の常習者の特徴としては、唾を吐く、水分を摂取する、しゃべる、しきりにキョロキョロする、落ち着きがない、夏場でも長そでや包帯で注射のあとを隠すなどがある。また、薬が切れると不安感、イライラ感が高じる。ひどくなると、天井や壁のしみが人の顔に見える、毛虫や蛇が徘徊する、さらに幻覚や発作によって凶悪犯罪を起こすこともある。

こうして、一番目の取引現場でバードウオッチングをしていた無法松と、U組の三人組が出会ってしまったのだ。やはり、あの箱は覚醒剤が入っていたのだ。無法松が去るのを途中までついて行った下っ端の若い男が戻って、双眼鏡の男と目つきの悪い男に言った。
「あいつ、どっかで見たことがあると思ったんすよ。思い出したっす。山谷の夏祭りで、やぐらの上で太鼓叩いてたんだ、あの男は」
「いいか、お前。組長には箱をあいつに持っていかれそうになったなんて言うなよ。ただ、シャブの受け取り現場を見られただけなんだからな」

三人はシャブの入った箱を持って組の事務所に戻った。
「……ということで、こいつが言うには、山谷のただの日雇いだそうですよ。まあ、変な奴じゃないみたいです」と双眼鏡の男が組長にあっさりと報告した。
「それは確実か？」。組長は三人をじろりと見た。
「ええ、山谷で見た奴だと思うんすが……」。二人から組長の前に押し出された、下っ端の若い男はおどおどしていた。
「思う？　バカヤロー、シャブが絡んでんだぞ。俺たちの死活問題なんだから、念には念を入れろ。二、三人で山谷に行ってきっちり探ってこい。日雇いの恰好だぞ。間違っても変な格好で行くなよ」
それから数日後、戻って来た二人が言った。
「組長、ちょっとやばいことを聞いてきました。日雇いでいっぱいの立ち呑み屋で張ってたんですがね。あいつはすぐ見つかりましたよ。こっちが黙って聞いてたら、みんなから無法松なんて名前で呼ばれてまして……」
「それで、要点はどうなんだ」。組長はじれったそうに言った。
「奴がいなくなったんで酔った日雇いに聞いたんですよ。毎年、夏祭りで下手な太鼓を叩いてるって報告がありましたが、確かにそうでした。でも、その夏祭りをやってるのが警察や山谷が縄張りの組とぶつかってるアカの組合だったんですねえ。だから、そのメンバーかもしれないと思って、もうすこし探りを入れたんですよ。驚くじゃあ、ありませんか。奴は昔、原発に反対する活動をしてたらしくて、そこで手配の人夫出しとぶつかってたらしい。いまも『野鳥の会』山谷支部なんて名乗っていまして。あっ、これは原発反対のそういった活動をする団体の名前でして、実際、野鳥なんか関係ないみたいですよ。まあ、そういうわけでカタギの日雇いかどうかは疑問で、アカじゃないですか？」
「それで、肝心なのはそいつがシャブってことに感づいたかどうかだ」と組長。
「感づいてるのか、感づいてねえのか、そこはちょっと……でも、なにせアカの組合ですからねえ」
「うーん、そういうことか。まずいな。やるなら早いほうがいい」
その後、無法松はモガキに襲われ、瀕死の重傷を負った。

証拠品倉庫に保管してある覚醒剤の紛失が発覚した。警察の上層部はこの不祥事がマスコミなどで報道されないように内密にすることを決定した。M警部に対して事情聴取が行われたが、警部の否認と、何よりもこの情報が世間に漏れることを恐れたため、それ以上の追及はなされなかった。警部は業務上の失敗のため自主的な退職という形で、退職金をもらい警察から去った。その後、なくなった覚醒剤がM警部からヤクザ組織に流れたという噂が警察内で囁かれるようになった。警部は大手の探偵社に就職した。ただ、本来なら上級職の元警部なら探偵社の幹部として迎えられるはずだが、なぜかまったくの平の探偵として入社したのだった。

ある日、その探偵社に昔の同僚がMを尋ねて来た。現役の警部だった。その後、Mは自ら命を絶った。

横浜分室に勤務する麻薬取締官ヤマダからヒガシに電話があった。
「ちょっと話したいことがあるから会わないか？　どうだい、中華料理でも食わないか？　おごるぜ」
横浜中華街は、JR石川町から歩いて五分のところにあり、いつも大勢の人でにぎわっている。それとは対照的に、駅の反対側には、日雇い労働者が多く集まる寄せ場の寿町がある。二人は中華街の裏通りにある店にいた。
「ここの中華は、知る人ぞ知るのうまい料理を出すんだ。酔っ払う前に、話をすませちゃおう。この間、ほら噂話のことを『火も煙もない』って言ったけど、それがなあ、噂が出てきたんだよ。ノンキャリアの警部補じゃなくて、警部だってさ。まあ、噂っていえば噂なんだけど、まったくのガセとは言い切れないみたいなんだよ。話の筋はこういうこと……」
「なるほど、それが本当だとすると、こっちの探ってきたこととつじつまが合うな。で、その元警部はなんていう探偵社にいるんだい？」
「それがなあ、どうも死んだらしいんだ。これも噂の域を出ないんだけれど、その探偵社に昔の同僚が訪ねて来たらしい。それがきっかけか、どうかわからないが、自殺したみたいだ。この話、できすぎって気もするが、いちおう、ヒガシ探偵に話しておこうと思ってな。この間は『テレビの世界の話』なんて言って片付けちゃったから」
「というと、暴力団に流れた覚醒剤は取り戻せないでそのままか？」
「まあね。警部は何も話さずに死んだらしいから暴力団を特定できなかったようだ。とはいっても、だいたい見当はついてるみたいだけれど、上層部が表沙汰になるのを恐れたのか捜査のそれ以上の進展は……適当にやって結局うやむやだな」
「うーん」
「警部は退職金と覚醒剤を売った金を持ち逃げして、あの世で優雅に暮らしてるってわけだ」。そこまで言って、麻薬取締官は運ばれてきた中華料理をうまそうに食べ始めた。

次の日、この話を「無法松君事件を糾明する会」の集まりでヒガシがすると、「やっぱりな。警察って信用できないんだよ。内部のまずいことは隠すんだ。それで、こっちがちょっとでも変なことをしたらマンモス交番にしょっぴくんだから。その元警部も自殺じゃなくて、殺されたんじゃねえの。警察内部の『闇の殺し屋』によ」
「おっ、八つぁん一流のドッキリ発言だねえ」とご隠居が冷やかす。八つぁんはすこしムッとしている。
「八つぁんの推測が本当だったら、大特ダネだわ。私は一躍、有名ジャーナリストになっちゃう」とタカハシ記者が嬉しそうに言った。
「それなんですがね。シャブっていえば……ついこの間、『世界』で呑んでたら、赤シャツ

が『また一つ、思い出したぜ』なんて得意そうにこっちに寄ってきたんですよ。でも、あいつの記憶なんてさび付いてて、あてにできるかどうかは保証できないけれど」と熊さんがみんなをぐるっと見回した。
「もう三年ほど前のことらしいんですよ。玉姫公園でアオカンしてた男が死んじゃいまして……」
「行旅死亡人が多いいねえ」とご隠居がため息をついた。
「玉姫公園で同じようにアオカンしてた仲間が見つけたんだけれど、それが変な死に方でして。たまに見かける男だったけど、寒さや弱ってというんじゃなくて、目を見開いたまま死んでたそうですよ。まさか死んでるとは思わないから、『おい、大丈夫か』って声をかけたんだけど、もう駄目だった。どうも、シャブじゃないかと。そいつはシャブの常習者で、その買う金がほしくてシャブの売人をしてたみたいで。山谷でも売ろうとしたけど、売ってるところを仲間に見つかっちゃった。それで、みんなに囲まれて、その中に赤シャツもいたそうで、『お前、何やってんだ。そんなのやったら体がボロボロなっちゃうじゃねえか。俺たち日雇いは体が資本なんだよ。こいつ金のために仲間の体をシャブ漬けにしようとするきたねえ奴だ』と追及されたり、どつかれたりで散々な目に合って、山谷から追放状態になってたそうです。でも、いつの間にか戻ってきてた。そいつはヤクザの組員じゃなかったけれど関係があったから、組にひどい迷惑でもかけてやられたっていうことも考えられるけれど、やっぱりシャブ漬けになって死んだんじゃないかって赤シャツは言ってたな。例によって、警察は適当に処理してしまったみたいですがね」
「シャブの売人なんかやってたんだから悪い奴に違いないけれど、なんか哀れだな」とヒガシ探偵。
「シャブ売りもうまくいかなくて、にっちもさっちもいかなくなって、また山谷に戻ってアオカンしてたのかねえ」と八つぁん。
「しかし、覚醒剤は怖いな。どっかで一つ間違ったんだな。ヤクザの下っ端のシャブ売りも哀れか。するとヤクザのうしろでチョロチョロしてるモガキも哀れなのかな？」
「ご隠居、無法松が死んだんですからね。哀れなんて言えないですよ」と熊さんが声を強めた。

18

この物語の舞台である一九九〇年は、バブル経済がはじける一年前のことだ。では、泪橋から「世界」が見えるのだから、このミクロの地点から見える縮図としての世界はどうだったのだろう？　下層の日雇い労働者とどこが関係あるんだ、と言うなかれ。すこし当時の情勢を覗いてみることにしよう。
一九八九年十一月には、ベルリンの壁があっという間に崩壊してしまった。一九九〇年二月南アフリカ共和国ではアフリカ民族会議（ＡＮＣ）の合法化、および終身刑で二十七年収

監されていたネルソン・マンデラが釈放され、アパルトヘイト体制が崩壊に向かった。これらは、つい前までは考えられないことだった。一九九一年一月湾岸戦争が勃発、アメリカ軍主体の多国籍軍がイラクに軍事力を行使（二月停戦）。さらに、十二月ソビエト社会主義共和国連邦が消滅してしまった。びっくりである。一九九二年ボスニア・ヘルツェゴビナの独立をきっかけに内戦が本格化、ＮＡＴＯ軍が介入し、セルビア人拠点を空爆（一九九五年和平協定調印）。

さらに、すこし先を見れば、一九九四年の一月一日、メキシコ南東のチアパス州で先住民のサパティスタ民族解放軍（ＥＺＬＮ）が武装蜂起した。アメリカ・カナダ・メキシコによる北米自由貿易協定（ＮＡＦＴＡ）の発効に対しての行動だった。この三国による自由貿易協定は、貧しい農民にとって死刑宣告に等しいものだった。ＮＡＦＴＡがもたらす貿易の自由化によってアメリカには雇用が生み出されるといわれたが、逆に雇用は失われた。また、メキシコではトウモロコシ生産が壊滅的となり、農村地帯は困窮、仕事を求めてアメリカに流入する移民が増加した。のちに、トランプ前大統領がメキシコ国境に壁をつくろうとしたのは皮肉としか言いようがない。

こう見ていくと、自由の扉がすこし開かれたのかと思われたが、それもやがて戦争の消炎と、下層民にとってより過酷な新自由主義的な経済にとってかわられていった。

※ネルソン・マンデラ＝一九九四年全人種参加の普通選挙で大統領に就任。一九九九年一期限りで大統領を退任した。なお、一九九三年当時の大統領のデクラークとともにノーベル平和賞を受賞。

※サパティスタ民族解放軍（ＥＺＬＮ）の「武装蜂起」＝明らかに貧弱な武装をした先住民に対して、政府軍は空爆などを実施、これらの鎮圧行動で約一五〇人が死亡した。

もう夏である。まわりからはミーンミーン、ジージーという耳の奥まで響いてくる蝉の鳴き声が聴こえてくる。野鳥の声などはかき消されているのだろう。今日のご隠居は、散歩コースをかえて公園のほうに行ってみた。いつもより少し早い朝、木々の陰が伸びたところにあるベンチに座ってみると、心地よい風が通ってきた。夏は生き物にとって活発に動き回る季節なのだろう、そこらをムクドリがチョコマカ動き回っている。エサを確保するのにも容易なのか、冬や春に比べていくぶん肉付きがいいように見える。

「おや？」

道で蝉がひっくり返って飛び立てないのか、ひっきりなしに翅（はね）をバタつかせている。その動きは、まるで火のついたねずみ花火が地面でクルクルまわっているようだった。

「そういえば、熊さんが仰向けになって飛べないアブラゼミがあわれだとか、そんなことを言ってたなあ」

ご隠居はその蝉を起こしてやろうと思い、近寄ってしゃがもうとした。まだクルクルまわっている。どうも様子がおかしい。じっと見た。それは、ひっくり返って飛び立てないのではなかった。蜂が蝉に食らいついているのだ。それで蝉が逃げようと思って暴れているのだ

った。クルクル、バタバタ。それから何度か蝉の抗いが続いたが、次第に動きは鈍くなり、片方の翅が取れ、そしてついに蝉の動きは止まった。すると、蜂は勝ち誇ったようにもう一方の翅をくわえたが、それもすぐに離して、なぜかご隠居の頭の上を一回りして飛んで行ってしまった。体長は三センチくらい、尾っぽのほうがオレンジ色に黒い輪のような模様の蜂だった。ミツバチはあんな攻撃的じゃない。というと、スズメバチ？

「食べるんじゃなくて、体液でも吸ったのだろうか？」

家に帰ったあと、どうも気にかかる。すこし暑さの弱まる頃を見計らって図書館に行って調べてみよう。図書館は、勉強中の中高生でいっぱいだったが、それに混ざって暇を持て余している年寄りが何人か新聞を読んでいた。ご隠居が男の横を通り過ぎたとき、読んでいたスポーツ新聞の記事が目に入った。南アフリカのネルソン・マンデラについてのものだった。

「ふーん、マンデラはもう七十を超えてるんだなあ」。ご隠居は、スポーツ新聞でネルソン・マンデラやアパルトヘイトに関する記事が掲載されていることにちょっとばかり感心した。

「やっぱりスズメバチだったか」。ご隠居は昆虫図鑑でスズメバチの写真を見つけた。「何？体液を吸ったんじゃなくて、翅のところに付いてる筋肉を食べていたのか。いたずらに翅をむしり取ったわけじゃないんだ。人間みたいにわけもなく殺しはしない、それが自然界の法則だからな」。ここで、ご隠居はいくぶん納得したかのようにうなずいた。

南千住駅の改札口から出てくると、コツ通りを駅のほうへ歩いてくる熊さんと、サチの姿が見えた。

「おや、熊さんにサチくん、仲良くどこに行ったんだい？」

「なーんだ、ご隠居ですかい。急に声をかけるからびっくりするじゃないですか。いや、ちょっとサッちゃんに山谷の案内をしようと思って、それでいま回向院に行ってきたんですよ」と熊さんが照れた。

「鼠小僧って本当にいたんですね。びっくり」。そこで、サチがすっとんきょうな声を出した。

「歌舞伎や本なんかで有名だからねえ。架空の人物と思われてもしかたがないな。向こうのほうが小塚原の刑場で、市中引き回しのあとで処刑されたんだよ。回向院には他に吉田松陰とか橋本左内などの墓もあるねえ。彼らは小伝馬町で処刑されたそうだけど。あとそこの首切り地蔵は見たかい？」。ご隠居が延命寺のほうを指さした。

「えっ、首切り地蔵！　そんなのもあるんですか。ふーん、山谷って昔からけっこうやばいとこだったんですねえ」と、サチはご隠居の話を聞いて感心した様子。

「山谷のはずれには、江戸時代、遊郭の吉原もあってすごくにぎわっていたそうだ。吉原って知ってる？　遊女といわれる女の人が……」

「それって、時代劇に出てくるあれね」とサチ。

「そうそう」と言いながら、なぜか照れくさそうな熊さん。

「ところで、熊さん、以前、アブラゼミがひっくり返っちゃって、バタバタ翅を動かしてもどうにも飛び立てない。それがやるせないって」

「そんなこと言いましたっけ？」
「おいおい、自分の言ったことなんだから忘れるなよ」
「へい、すいません」と言って熊さんが頭を掻いた。
「いまそこら中でアブラゼミの鳴き声が聴こえるだろう。それで思い出したんだ、熊さんの言葉をね。ちょっと考えると不思議だよな。いや、不思議というよりおかしくないか。だって、ひっくり返ってるのを『どっこらしょ』って寝返りができないなんて。生き物は厳しい生存競争の中で生き抜いてきてるんだから、そんな構造的な欠陥を抱えてたんではまずいんじゃないか」
「そんなこと、考えたこともなかったなあ。でも、ご隠居、蝉ってずっと長いこと地中で生きてきて、それで地上に出てきて、ジージー鳴いて、短い命は終わりって」
「確かに、生き物にはそういうサイクルの最後のほうで、ちょこっと子どもをつくって、あとはもう死んじゃうっていうのも多いけど。でもねえ、ちょっと違ったんだなあ。さっき図書館に行ったついでと言っちゃ何だけど、調べてみたんだ」
「何か、びっくりするようなアブラゼミの秘密がわかった？」
「いやあ、そんな大げさなことじゃないけど。アブラゼミって足についてる爪のようなものでしっかり木にとまってるだろう。でも、何かの拍子で地面に落ちたりすると、もう起き上がれない。そう思ってたんだけど、実はそこが草むらだったらその足で草をつかんだりして起き上がれるんだ。つまり、落ちたところが足でつかむところのない舗装された地面だったら起き上がれないってこと。これは八つぁんが言ってたミミズの悲劇もそうだな。堅い地面じゃ土に戻れない」
「じゃあ、アブラゼミが道でひっくり返って死んでるのは、舗装した道をつくった人間のせい？」。ここでサチが口をとがらせた。
「人がつくったもので、あわれ野垂れ死にか」と熊さん。
「でも、熊さん、その人がつくった舗装道路の上を私なんか二輪で飛ばしてんのよ」
「そうだった」と熊さんが声を落とした。
「それからアブラゼミだけどね、野鳥の餌になってるそうだよ。自然界は厳しい」

夜の六時を過ぎていた。まだあたりは明るかった。池袋東口の裏通りの一角、ヒガシ探偵と熊さんの二人が、通り過ぎる人の流れをそれとなく見つめている。ここらあたりがU組の縄張りの中心らしい。そんなに広くない領域だが、それでもひっきりなしに人が往き来している。サラリーマン風の男や、しゃれた恰好の女が大勢の表通りとはすこし違って、どことなく汗のにおいがする。
「やっぱり、都会だねえ。山谷とはずいぶん違うよ」と熊さんの声がどこかうきうきしている。「ヒガシさん、こう人がウジャウジャいちゃあ、無理ってもんですよ」
「今日は様子見だよ。俺も池袋なんてずいぶん来てないから。まずは土地勘を頭にいれてね」
あわよくば、ここで、無法松を襲った山谷の元モガキ、現在はU組の構成員になった二人

を探し出せればという気持ちもすこしはあったが、それは至難のわざだというのがすぐにわかった。
「ヒガシさん、やっぱりあの川崎競馬のインチキ予想屋をもうちょっと絞り上げて、二人組がシノギをしている現場のことを聞き出したほうがよかったんじゃないですか」
「いや、もうあいつが知ってることはないよ。こっちを本物の警官って信じてたし、あれだけ脅かしたからな。嘘をついて、それがばれたら大変だって思ってるだろうし。あいつだって、モガキ二人組なんて自分とは関係ないんだから、早く捕まってくれたほうがせいせいするだろう」
「じゃあ、どうしましょうか。ここでぼーっと立ってたってねえ。この間の川崎競馬のときみたいにバッタリ出会っちゃうこともあるんだけど」
「熊さん、そんなラッキーは二度とないよ。二度とないからラッキーなんだ」
「そうですよねえ。だいたい、こんなところでシャブのシノギを大ぴらにしてるはずなんてないですよね」
「そうだな、そろそろお開きにするか。土地のヤクザ者に因縁でも吹っ掛けられたらたまらんからな」
「あっ、そのヤーさんに訊くってえのはどうです？」
「えっ？」
「ヤーさん風のチンピラに訊いちゃうっていうのは？『昔の友達なんですが、最近、U組に入った二人を知りませんか』って。偉そうなヤーさんだったら『お前、何だ？』なんて睨まれるかもしれないけれど、チンピラならいきがっているかもしれないけど、中身が空っぽだから、場合によっては教えてくれるかも……」
「そいつは熊さんしか考えつかないアイデアだな。でも、ちょっと危険だな」
「危険ですかねえ」
「じゃあ、熊さんに負けずに俺もやばいアイデアをひとつ。そこらへんのちょっといかがわしい呑み屋にでも入って、冗談半分に『シャブを買いたいんだけどな』なんて言ってみるのさ」
「そいつは、もっと危険じゃないんですか？」
「いやー、いざとなったら例の手帳を見せて、切り抜けるよ」
「なーるほど」
「それはともかく、せっかく池袋に来たんだから一杯、呑みますか。喉も乾いたし」
「賛成！」

熊さんは夢を見た。
熊さん、それに赤シャツ、坊主頭、八つぁんの四人が、縛られて椅子に座らせられたモガキ二人組の周りを取り囲んでいる。モガキ二人組を捕まえたのだ。ヒガシ探偵、ご隠居、タカハシ記者、サチの四人の姿は見えない。

「お前たち、何をやったかわかってんな！」と言いながら坊主頭が二人の足を蹴った。
「無法松に謝るんだ！」。熊さんが怒鳴った。
「す、すいません。すいません」。一人が消えいるような声で謝ると、もう一人も続いて謝った。
「山谷の労働者みんなにこれまでしてきたことを謝るんだよ」と赤シャツの声。
「すいません」。二人一緒に声を出した。
「声がちいせえんだよ」と言うが早いか、赤シャツが二人の頭を強くこづいた。
「お前たちのせいで無法松が死んだんだよ。無法松だけじゃないだろう。大怪我して日雇いができなくなった仲間もいたんだ。これまでのことを全部白状しろ！」と熊さんがまた怒鳴った。
「それはー、他にはー」とモガキの一人。
「とぼけやがって」とここで坊主頭がそのモガキの顔にパンチを食らわした。モガキはその勢いでうしろにひっくり返りそうになった。「お前はどうなんだ？」ともう一人にも坊主頭がすごんだ。
「金は取りましたが、そんな怪我はさせてなかったと……」
「怪我させてねえだとー」と言って今度は赤シャツが殴りかかった。ところが、そのモガキがうしろに反ったため赤シャツのパンチは空振りとなった。「こいつ逃げやがったな」と言ってすこし逆上気味の赤シャツが再び殴りかかった。坊主頭のパンチに比べて、ダメージは小さかったが、ともかく顔面にヒットした。さらに、赤シャツはもう一人のモガキにも一発食らわした。
「さっさと白状しろ。でないと、いつまでも続くぞ。えっ、どうなんだ」と熊さんが二人の頭を叩いた。
「それが……はっきりと思い出せないんです」と坊主頭に殴られたほうの一人が言った。
「思い出せない？　やられたほうは覚えてるんだよ。こいつら、なめてんだな」と殴りかかりそうになった熊さんを止めるようにして、ここで初めて八つぁんが口を開いた。
「お前たちなあ、人が一人大怪我をして、それが原因で死んだっていうのに悪かったって思ってないみたいだな」
「そ、そんなことはないです」とモガキの一人。
「では、何で自分たちがやったことなのに思い出せないんだ？　もしかしたら、ここで何発か殴られるのを我慢すれば終わるんだって、腹の中でペロッて舌を出していないか」
「そんなことはないです」と今度はもう一人のモガキが言った。
「じゃあ、はっきり思い出してもらおう。お前たちの謝罪というのはそれが前提だよ。それがないと、俺たちは無法松や日雇いの仲間に顔向けができないんだよ。とにかく、自分たちのやったことを全部話さなければ、この場はずっと続くぞ」
「あれっ、八つぁんが八木刑事になってしまったよ」。夢がさめてまだ頭の中がボーっとしている熊さんがつぶやいた。

19

「ここから、まっ正面に『世界』が見えます。じっと見てると、世界はどうなってるんだろうなんて考えちゃいます。山谷の『世界』と世界はつながっているのに、私にはそれがよく見えないんですよ。それじゃあ新聞記者として失格ですよね」。珍しく、ちょっと弱気なタカハシユウコ記者からご隠居の家に電話がかかってきた。いま泪橋の交差点にいるという。

「山谷にいるんなら、うちに来ないか？　いや久しぶりに『大利根』でも行こうか？」

「そうですか、実はご隠居と話がしたかったんです」

ここは「大利根」、相変わらず労働者でにぎわっている。そこへちょっと異質な二人。

「タカハシさん、泪橋から世界が見えたんだね？」

「呑み屋の『世界』はしっかり見えるんですけど」とタカハシが苦笑いをした。

「その世界という言葉で思い出した人がいるんだ。絵描きのクロキさんという人なんだけどね。わしよりすこし若くて、絵じゃ食っていけないから、ふだんは日雇いをしてた」

男が泪橋の交差点に立っていた。立っている向かい側の立ち呑み屋「世界」をさっきから見つめている。シミや顔に刻まれた皺からはもう五十に届いているように見えるが、寄せ場の男たちが実際以上に老けた年恰好に見える例からすると、もっと若いのかもしれない。実際に、小柄な体ながら肩に付いた筋肉が肉体労働者のそれであることを物語っていた。クロキというその男は、立ち呑み屋に入るそぶりなど見せずにまもなく立ち去って行った。クロキは、ふだんは週に二日ほど日雇いの仕事に出ていたが、それ以外は六畳一間のアパートで画を描いていた。いや、描くというより、狭い部屋を占拠している畳半畳くらいの大きな一枚の画を睨んでいた。

ご隠居が語る絵描きのクロキさんのこと。

――クロキさんは小さい頃から絵が好きだった。勉強が嫌いだったこともあって絵描きになりたかった。ただ、勉強ができないとこの国では有名な美学校には入れない。それで、小さな美術学校に入ったが、そこもクロキさんの気に入るところではなくて、途中でやめてしまった。詳しくは語らなかったが、そこでも上昇志向の強いものが幅を利かせていたそうだ。しかし、中退したことで親の仕送りがなくなり、食うために働かなければならなくなった。仕方なく、たまにアルバイトをしていた日雇いの仕事をするようになった。肉体労働はきつかったが、日銭が入ること、そのため画を描く時間も工夫をすればつくれるのでクロキさんにとって悪い仕事ではなかった。日雇いで稼いだ金をなるべく散在しないように心掛けた。画材も高いし、ドヤ代だって馬鹿にならない。温かい夏場などはほとんどアオカンをしていた。こうして、ある計画のため、すこしずつ貯金をしていった。

こんなクロキさんでも、やはり美術の街・パリに一度は行ってみたかったのだ。しかし日

雇い稼業で遠いパリへの渡航費を捻出するのは難しい。ましてや、パリで遊学するなんてことはとても無理だ。今のペースで金を貯めていってもパリに行くのはいつになるのやら。

「えーい、ダメもとだ、叔父に頼んでみるか」。下層のプロレタリアが資本家に頭を下げるのは良しとしないが……。こうして事業を手広く展開している叔父に借金を頼んだのだった。「パリに行ってすこし勉強してきたいのですが、手持ちの金では足りないんです。すこし貸してくれませんか」と。ところが意外や意外、結果はＯＫだった。「パリか、お前もやっとその気になったか。真面目に絵の勉強をしに行くのなら貸してもよいが、遊びは駄目だぞ」

クロキさんがパリに着いて、まず行ったところは、定番のルーブル美術館だった。そしてほかの美術館にも足繁く通った。一通り美術館巡りを終わると、さてやることがない。美術館で模写をしている者をちらほら見かけたが。それには興味がなかった。それで、デッサン帖をもってパリの街にでかけることにした。すると、風景画のデッサンがどんどんたまっていった。郊外だけでなくパリから遠いところにも足を伸ばした。デッサンはさらに増えていった。だが、なにか物足りなかった。俺が求めるものはもうここにはない。

クロキさんは、日本に帰ることにした。さて、叔父にどう報告しようか。借金は返せない。そこで、一枚のデッサンをもとに油絵を描き、それをすこし見栄えのする額縁に入れたものを叔父に持っていった。「借りたお金の利子と言っては何ですが……」とクロキさんは小さな声で言った。

すると、叔父は「パリの風景画か、これはいいな。会社の応接室にでも飾るか」と上機嫌だった。「他にもあったら持ってこい。家に飾るから」

力を入れて描いた画じゃないのにな。もしかしたら、この手の画は売れるのかもしれない。これまでは、ただ自分が描きたい画を描いていただけだった。自分の画が売れるなんて考えたことがなかったクロキさんは、不思議な気持ちだった。それからは安アパートの一室にこもってパリ風景画の制作に没頭した。金がなくなると日雇いに出た。そして、一年かかって三十枚ほどの画を完成させた。

叔父に事情を話すと、画廊、宣伝、価格の設定などに尽力してくれた。半年後にクロキ個展「パリの風景画」が開かれた。結果は二十六枚が売れ、経費や叔父の借金を返したあとにもいくらかの金が残った。しかし、画は売れたが、クロキさんの心は満たされなかった。売れ残った四枚の画は燃やしてしまった。それ以来、一度も個展は開いていない。それが叔父には、元のやる気のない男に戻ったと映ったのだろう。ついには「日雇いの怠け者」というレッテルを貼られた。

クロキさんは一枚の未完の画に執着していた。ご隠居は一回その画を見せてもらった。大きな画で、色調はやけに暗かった。クロキさんは、「ここが山谷の泪橋ね、ここから地下の回路がにゅーっと出てて、それがクネクネ曲がりながら向こうの釜ヶ崎の三角公園につながっているんだ」と熱心に説明してくれた。その熱さの裏にある「何か」とクロキさんは格闘しているようだった。そのクネクネ回路の上のほうでは、顔の見えない兵士が銃を乱射し

ていて、数人が天に向かって叫びを上げている。ところどころで火の手が上がり、死人がゴロゴロ転がっている。下のほうでは、狭い坑内でうつぶせの恰好で坑夫が石炭を掘り出している。そのうしろには女坑夫が運搬かごのスラに石炭を積み込んでいる。その横では、ツルハシやスコップを持った何人もの男が道路と格闘している。彼らは強制的に動員されたのか、それとも捕虜なのか、うしろには太いムチを持った鋭い目つきの男が立っている。他にもごちゃごちゃといっぱい描き込まれていたが、ともかく、とても変な画だった。クロキさんは、「まだまるでできあがっていない」と言っていた。

その後、道端でクロキさんに会ったときに「画はどうなった?」と聞いても、「いや、駄目だな。何かが足りない、いや多すぎるのかな、わからないんだ。それで、今度、ニューヨークに行って職安を見てくるよ」と言っていた。こっちが「ニューヨークの職安?」と怪訝そうな顔をしていると、「そいつがあの画に一本筋を通すんだよ」とわけのわからないことを言っていた。それからも山谷で何回か会っているが、ニューヨークに行った気配なんてなかった。でも、いまから五年くらい前、彼はこの山谷から突然、姿を消した。ついに、ニューヨークに行ったのか――。

クロキはある日、日雇い仲間から「大阪の釜ヶ崎でいい仕事があるから一緒に行かないか」と声をかけられた。西の釜ヶ崎に行ってみたかったこともあり、すぐにその誘いに乗った。そして、次の日には、仲間と釜ヶ崎に立っていた。

朝の職安に行ってみた。山谷と比べて仕事の出具合はどうかということを知りたかったからだ。そのとき、紹介順に並んでいた一人の男が、「オーオー」と声をかけてきた。「何だ?」と不思議に思い、そちらのほうを見ると、一週間ほど前に山谷で一緒に仕事をしていた仲間だった。ただ、そのあと、彼の姿を山谷で見かけなくなった。玉姫職安にも、泪橋の立ちん坊のところにもいない。どこに行ったんだろうと思っていたら、釜ヶ崎に来て紹介を受けていたのだ。驚いた。そして感心もした。ふだんから、日雇い労働者はあっちこっちに流動している。こっちが駄目で、あっちがよく見えたらすぐに移動するのは知っていた。だが、それにしても……。

西と東の寄せ場には秘密の通路があって、それで山谷と釜ヶ崎はつながってるんじゃないか。それは不思議な地下水脈。実際、西で暴動が起これば、すぐに東もそれに呼応して暴動が起こる。山谷が爆発すると釜ヶ崎が爆発する。釜ヶ崎が爆発すると山谷も爆発する。

そうだ、ニューヨークにも職安があって、山谷でしばらく見ないと思っていた労働者が、ニューヨークの職安にいたなんてこともありうるんじゃないか。近い将来には、きっとそうなる。山谷や釜ヶ崎の寄せ場と、ニューヨークやロンドンの寄せ場がつながって、ひとたび、日本の寄せ場で暴動が起きれば、ニューヨークやロンドンの、いや世界中の寄せ場で誘われるように暴動が起こる。そんなことをクロキは夢想していた。

「その絵描きのクロキさんがずっと格闘している『何か』って考えさせられるわ」とタカハ

シがしみじみと言った。
「人が世界とまっとうに対峙すると、いろいろと大変なんじゃな。わしなんて単なる老人だからもうそんな悩みとはご無沙汰となってしまったが……」
「でも、ご隠居もずっと旅をしてたじゃないですか？」
「ずいぶん昔のことじゃよ」
「そうですか。人は……なんで旅をするんでしょう？」
「どうしてだろうねえ。わしなんか、ただ、日本中をぶらぶらさまよっていただけだなあ。目的なんてなかった。逃げてるってわけではないけれど、ひとところに落ち着けない。それで、そこを追われるようにして次のところを目ざす。目ざすって言ったって別にどこに向かうなんてないんだけどね」
「危ない目にもあったんでしょ」
「そんな危険なことはなかったなあ。ああ、間違って変なところに行って寒くて死にそうになったことがあったな。でも、アメリカのホーボーみたいなことはなかったよ。『アメリカ浮浪記』という小説や、映画の『北国の帝王』では、無賃乗車のホーボーに対して車掌や制動手が撃退するんだけど、中にはその非情な手段で機関車にひかれて死んでしまう場合もあったようだ。それだけじゃない。ホーボーが野宿してると、夜、彼らを毛嫌いしてる在郷軍人会の連中なんかがバットや棍棒などを持って襲ってきたそうだ」
※『アメリカ浮浪記』＝アメリカの作家、ジャック・ロンドンの小説。原題は The Road。ジャック・ロンドンは社会主義者でもあった。
※『北国の帝王』＝一九三〇年代の世界恐慌下のアメリカを舞台に、鉄道の無賃乗車で放浪を続けるホーボーとそれを絶対に許さない残忍な車掌との対決を描いた映画。ロバート・アルドリッチ監督、主演はリー・マーヴィンとアーネスト・ボーグナイン。一九七三年作（日本公開も同年）。
「まるで、少年たちのホームレス襲撃と同じですね」
「そうだな。ひどいもんだよ。そうだ、ひどいっていえば、すぐそこの小塚原の刑場跡から鉄道工事の際に何回も人骨が掘り出されてね。処刑された人たちの骨らしいんだけど、その扱いがひどくて、とても人を埋葬するなんてものじゃない。死体をそのままいっしょくたに埋めていて、まるで物を捨てたり処分したりっていう……」
「罪人だからってことですか？」
「そうだろうねえ。それと、人骨が発見されたっていうニュースの伝え方なんだけど、異様さをことさら強調しただけのものでねえ」。ここでご隠居がフーッと息をついた。
「戦争で何百万人が殺されたっていう伝え方も同じですね。その殺された人それぞれには人生があったのに」
「そう、数じゃなくてその人の顔を想像する力がいるんだな。だから、一枚の未完の画に執着するクロキさんはすごいと思う」
「ところで、ご隠居、クロキさんは本当にニューヨークに行ったと思います？」

「うーん、それならいいんだけどな。ニューヨークの寄せ場、あっ、向こうではスラムか。そこでイマジネーションを刺激されて、画の完成を目ざしているんだったらな。でもなあ……」
「でも？」
「この頃、わしより若い労働者が死んでるんだよ。ついこの間までバリバリ働いてた者がねえ。ここ山谷や釜ヶ崎の労働者はきつい労働と、それから、八つぁんや熊さんを見ててもわかるだろう？　酒だよ、酒の呑みすぎもあって、若くしてあっちの世界に行っちゃうんだ。クロキさんも野宿してるんじゃないか、体を壊してんじゃないかなんて、どうも悪いことばかり考えちゃうんだ」
「案外、ニューヨークの水が合っていて元気に生きてるかもしれませんよ。だって、パリの経験もあるから、外国は慣れてるし」
「だったら、いいんだけど。タカハシさんを元気づけようとしたんだけど、なんか湿っぽくなっちゃったな。よし、もう一本。おねえさん、お酒をひとつ、できたらぬる燗で。ダメなら熱燗でもいいや。それから、タカハシさんは？」
「チューハイ」
「それを頼むよ」とご隠居が、白いうわっぱりの女店員に声をかけた。

ここで角度を変えて、もう一度、泪橋について記してみよう。
泪橋は、江戸時代、北の小塚原刑場、南の鈴ヶ森刑場という二大刑場の近くにかかっていた橋だ。つまり、山谷ともう一か所、鈴ヶ森刑場の近くにもあった。ちなみに、黒木和雄監督の映画『泪橋』は、ここが舞台。
山谷の泪橋は、かつては小塚原刑場跡の近くの思川（おもいがわ）にかかっていた。しかし、いまは思川が暗渠となっているため橋の面影はない。その名前は泪橋交差点やバスの停留所として残っているだけだ。なお、音無川が三ノ輪付近で二手に分かれ、一方は思川として泪橋を経て隅田川へ、もう一方は日本堤沿いに進んで山谷堀からこれまた隅田川に注いでいた。
※小塚原は処刑場として磔（はりつけ）、火あぶり、獄門が行われた場所で、小塚原刑場に行くにはこの橋を渡っていった。また、牢内で斬首された首はここに運ばれて晒された。泪橋は、処刑される者にとって、この世の見納めの場であるとともに、身内の者との今生の別れの場でもあった。
小塚原刑場は、一六五一年（慶安四年）に千住大橋南側の小塚原町に創設された。刑場の広さは間口六十間（一〇八メートル）、奥行三十間（五四メートル）ほどだった。小塚原刑場では腑分けも行われたという。
死体は、そのまま野ざらしにされたり、埋葬せずに土を被せるだけだった。そのため、夏になると周囲に腐臭が充満し、それに誘われた野犬やイタチなどが死体を食い散らかして悲惨な光景だったという。それを物語るかのように、戦後、鉄道工事中にたびたび人骨が出

土されている。
一九六〇年六月、日比谷線の鉄道工事の際に、大量の人骨が出土された。それらは首切り地蔵の前に山積みにされた。
一九九八年一〇月、つくばエクスプレスの建設工事中に、竹のタガがはめ込まれた直径七五センチメートルの筒状の丸い木枠の中から、一〇四人分の頭蓋骨が掘り出された。
二〇〇一年、二〇〇二年にも頭蓋骨二五二体と四肢骨約一七〇〇の大量の人骨が掘り出されている。これらはそのまま土に埋められた状態で出土された。しかも、狭い領域に、一平方メートルあたりちょうど二体分が詰め込まれるようにして埋まっていた。
なお、一七四一年（寛保元年）、高さ三メートルほどの大きな首切り地蔵が建てられた。そして一八七三年（明治六年）に小塚原の刑場は廃止された。

20

モガキ二人組がU組の構成員となってしばらくのことだった。二人はU組の本部事務所に呼び出され、H組長から直々に任務を言い渡された。それは警察に自首することだった。無法松襲撃を二人だけの単純なモガキ行為、つまり強盗傷害事件として出頭すれば、「数年の懲役だ。それで、ムショのつとめを終えて出てきたときには、組の功労者としての地位が待っているぞ」と言い含められてのことだった。ただし、「シャブのことは絶対に喋るな、喋れば二人の罪も重くなるし、組にも迷惑がかかる」と言われた。そうしないと将来の立場はない、組に逆らった者の末路はあわれだぞと半ば脅迫的な指令だった。
しかし、なりゆきで組の構成員になった二人には、組の犠牲になってブタ箱に数年ぶちこまれる義理はないと本心では思っていた。モガキ二人組の気持ちは揺れていた。
「トンコしちゃおうか」
「でも、逃げたら追っ手が来て殺されちゃうぞ」
「組のシノギのシャブが絡んでるから見逃してくれそうもないなあ」
「警察に行って洗いざらい喋ったら懲役を軽くしてくれるかもよ」
「そんなことしたら、塀の中で組の息にかかった奴に殺されちゃうんじゃねえか」
「そりゃ、アメリカ映画の話だろ？」
「だけど、それだってムショに二、三年は我慢しなけりゃなんねえし、出てきたら出てきたで組の奴に狙われるだろう」
「やっぱり、トンコするか。西のほうに行ければU組の縄張りから遠いから案外大丈夫だったりしてな」
結局、二人はトンコすることにした。二人一緒ではなく、バラバラに。すばやく動いた一人は何とか西に逃げることができたが、逃げ遅れたもう一人は組の者に捕まってしまった。
しばらくして、鈍器で何度も殴られた死体が一人路上で見つかった。やり方から殺意があるのは明らかだった。警察発表では、被害者は博徒系暴力団U組の下部構成員で、山谷で路

上強盗を働いていた二人組の一人ということだった。もう一人の仲間は現在逃亡中で警察は行方を追っていた。

U組はS会傘下の組織だが、S会からは異分子として睨まれていた。S会は裏ではともかく、表向きには覚醒剤をシノギとするのを禁止していたが、U組は従来からそれを半ば無視するように覚醒剤売買を行っていた。

そこに、警察の証拠品倉庫から覚醒剤数キロが紛失する事件が起こった。確かな証拠こそないが、左遷された腹いせにM警部がその覚醒剤を奪ったという噂が警察内部で流れた。そして横流しされた先は、おそらくM警部とかかわりがあったU組だろうと推察された。その結果、警察から徹底的にマークされるようになったU組はこの厳しい監視の中で、覚醒剤の売買ができなくなってしまった。H組長は手持ちの覚醒剤を処分できなければ組の存続も危ないと考えた。そして、ついにある決断を下した。個人的なルートでこの覚醒剤を横流しすることにした。ただ、相手はS会と対立する西の組だった。このことがS会の幹部の耳に入ってしまった。H組長はS会の査問会に掛けられた。

その三日後、H組長が死亡したという警察発表があった。のちに、ヤクザの間で拳銃によって自ら命を絶ったという噂が立ったが、一方ではS会によって詰め腹を切らされた、また殺されたのだという話も流れた。だが、その真偽のほどは、警察の発表でも触れられていなかった。

モガキ二人組の一人はU組の追っ手から逃れ、西のほうに流れて来た。「ここまではU組も追ってはこないだろう」。だが、手持ちの金はほぼゼロだった。彼には、日銭を稼ぐには日雇いしか思いつかなかった。飯場に入ればメシと寝るところが確保できる。背に腹は代えられない。とりあえず目立たない小さな飯場に入ることにした。ところが、そこは半タコ飯場だった。仕事はきつい、デズラはケタオチ、何かというと棍棒を振り回し労働者をこきつかっている親方が仕切っていた。

肉体労働など長いことやってなかったので、ことのほかきつかったが、しようがない、しばらくはじっと我慢だ。ここならU組の目も届かないし、いくらケタオチだってすこしくらい金を稼げるだろう。だが、その我慢も長くは続かなかった。

「テレテレしくさって、はよ仕事をせんかい、このボケ！」と親方に言われ、棍棒で尻を叩かれたときだった。

「おい、オヤジ、いい度胸をしてんじゃねえか。俺を誰だと思ってんだ」

「ほー、わしにはアブレ土方の、アオカン野郎と見えるで」

「俺はなあ、ここで詳しくは言えねえが、東のほうでひと一人やってんだよ」

「それがなんじゃい」とここで棍棒をクルクル回す親方。「わしなんか、昔、その十倍もあの世往きにしとるんじゃ。オメエみたいなしようもない奴をよ。スマキにして海にドボン、森の中にポイじゃ。オメエもそうしたろか」

「こんなちっぽけな飯場のオヤジのくせに大ボラ吹きゃがって。あのなあ、ホンマモンのヤ

クザはそんな嘘は口が裂けても言わないぜ」
「ハッタリかましとんのはオメエのほうやろが。東で何やらかしたか知らんが、どうせドジ踏んでトンコしてきたんやろ」
図星だった。痛いところを突かれ言葉が詰まった。
「こ、こんなケタオチ飯場のオヤジに言うわけにはいかねえが、この間まで大きいシノギを組から任されてたのよ」
「へぇー、ホンマでっか。それはそれは。てっきりサンシタ奴（やっこ）だとばかり思うてましたわ。人は顔つきだけではわかりまへんな」とオヤジがからかい口調で言った。
「ちぇっ、口の減らねえジジイだ。関西の奴は度胸がないくせに口だけは達者って言うが、本当だな。まあいい。俺もいまは一匹狼だ。ここでしばらく世話になるんだから、少々のことは大目に見てやらあ。昔で言えば、一宿一飯、渡世人としての義理もあるし。今日のところは歳のせいだと思って許してやる」
「なんちゅう言い草や、そりゃ、わしのセリフや。どうせ悪事ゆうたってしようもないケチなことやろ。そいつをサツにチクったりしたらわしが恥をかくわ。だから、サツには言わんといてやるからありがたく思え。いいな、しょうもないことしくさりやがったら許さんぞ」
モガキ男は、この半タコ飯場で一週間働いたあとトンコした。懐はほんとんどゼロだった。
一か月後、彼は別の飯場にいた。前の半タコ飯場と違って大きな飯場だった。ある日、飯を食っていると、隣の二人の声が聞こえてきた。
「東のほうでどっかの組の親分が自殺したんやて」
「えっ、親分がか？　ヤクザでも自殺するんか。殺されたんちゃうか」
「スポーツ新聞に出とった。覚醒剤で羽振りのええ組やったそうや」
「きっと覚醒剤がらみやな」
「詳しいことはようわからん。それとなあ、そのすぐ前に同じ組の下っ端がボコボコにされて殺されたんやて」
モガキ男は聞いていてドキッとした。どうもH組長が死んだようだ。H組長が自殺ねえ。とても自殺するようなタマじゃなかったのに。殺されたのかもしれんな。でも、俺にとっちゃあいい知らせだ。もう追っ手が来る心配もねえってわけだ。しかし、あいつ、殺されちゃったのか。ぐずぐずしてるから、そんなことになるんだよ。相棒が殺されたとなると、組長がいなくなっても当分、東京に戻るのは危険だな。
男はこのあと、人の目も恐れず、日雇い労働者でにぎわう釜ヶ崎に現れ、日払いの現金仕事をするようになった。ところが、まっとうな日雇い仕事をするのはそう長く続かなかった。
性懲りもなく、泥酔した労働者の懐を狙うようになったのだ。最初は、おとなしいやり方だったが、だんだん大胆になり、それにつれて暴力的になっていった。だが、何度かは首尾よくいったが、もう彼の悪運は残っていなかった。一人の労働者を襲ったとき、横道にいた数人の労働者仲間に気がつかなかったのが運の尽きだった。釜ヶ崎の労働者に取り囲まれ、「オメエ、何しとんのや」「許さんぞ」「いてまえ」という怒号とともに、みんなからさんざ

んどつかれたのだった。だいぶたって西成の警察官が駆けつけたときは、彼の顔はもう相当膨れ上がっていた。

モガキ男は拘置所にいた。顔の腫れはなくなった頃だった。強盗傷害の罪で起訴された。検察の求刑は、懲役一年十か月で、その言い分を男はほとんど聞いていなかった。初犯であること、労働者の被害も大きなものでなく、さらに傷害の程度も軽微ということで、本来ならば量刑はもっと重い……というようなことだった。ところが、国選の弁護士はまともな弁護をせず、そのため一審の裁判はあっという間に終わってしまった。求刑通りの判決だった。

モガキ男は不満だったが、山谷での無法松襲撃の件が入っていなかったのでホッとした。それに、いまは解散寸前とはいえ、その前に出された殺しの指令が残っているかもしれない。西の刑務所だったら、刺客をまさか送り込んでくることもあるまい。彼は一審の判決を受けてそのまま下獄することにした。しかし、ドジだったな、横道に人がいたなんてまるで気がつかなかったぜ。

ところが、刑務所の中で、突然、受刑者に殴られた。「オメエ、モガキだってな」。関西弁じゃなかったので関東のヤクザじゃないかとドキッとしたが、どうもそんな感じではない。しかし、なんでモガキというのがばれたんだ？　俺がここにいる理由を誰か喋ったのか？

モガキ男は、とっさに嘘をついた。「おい、俺はモガキじゃねえぞ。誰がそんなことを言ったんだ？」。奴が「あいつはモガキだ」なんてみんなに言いふらしたらまずいからな。他の奴からもやられるかもしれん。

「嘘つくんじゃねえ、どうみてもお前はモガキだ。俺は昔、横浜や川崎で日雇いをやってたからモガキの臭いがわかるんだよ。モガキっていうのは、この世の中で最低なクズだからな」。そう言い放つと、その男はモガキ男を睨みつけたあと、向こうのほうにスタスタ歩いていった。

西に来てからどうもツキがないな。半タコ飯場でこき使われ、釜でボコボコにされ、あげくのムショ暮らしだ。おまけに、ここで殴られて、どうも具合が悪い。U組から逃げられたことで運を全部使っちゃったのかな。

奴は「モガキの臭い」なんて言ってたな。まさかそんな臭いなんて……モガキ男は袖口を鼻に近づけて、自分の臭いを嗅いでみた。こりゃ、もうモガキはできんか。だいいち、危ない橋を渡る割に実入りもすくないし。商売替えか。しかし、ここを出てから何をする？

ここはひとつ、考えなけりゃならんな。何か楽していい商売はないもんか。日雇いはきついし、ケタオチだから問題外だな。シャブ？　いや、そんなものに手を出したら、今度こそヤクザに殺されちゃうぞ。原発で働けば、けっこういい稼ぎなるってことだが、そこで働き続けて、がんになって死んじゃったって話を聞いたな。賢い男はそんな危険な仕事はしない。

うーん。駄目だ、他に何も思いつかん。あーあ、眠くなってきたぜ。ここで、いまぐずぐず考えてもしょうがねえか。先は長い。ひと眠りして、また明日考えよう。

モガキ男は夢の中で、考えていた。とりあえず、シノギをするなら暖かいところがいい。

ドカ雪が降るところなんて真っ平ごめんだ。彼は東北の寒村の生まれで、そこの大雪と貧困にうんざりしていた。そうだ、常夏の国といえばハワイだ。ハワイに行ってギャングになるってのはどうだ。あそこなら、アメリカのホンマモンのギャングもいないだろうし、地元のヤクザだってそんなに強い奴はいねえだろう。これはいいぞ。でも、一人じゃ無理だな。誰か腕っぷしが強くて度胸のある奴を相棒にして……。そんな奴を見つけるにゃ、このムショはぴったりじゃないか。もう日本じゃなくて、これからは世界に目を向けなくちゃあ。

21

ヒガシ探偵事務所の留守番電話が点滅していた。ヒガシがその留守電を聞くと、タカハシユウコ記者からだった。「ちょっとした情報が入ったので連絡がほしい」とのことだった。

次の日のこと、タカハシ記者が勤務する新聞社の近くの喫茶店にヒガシとタカハシの姿があった。

「ふだんから山谷や寄せ場の出来事についてアンテナを張ってるんですけど、でもそんな情報はなかなか入ってこないんですよ。世の中は山谷のことなんか関心がないってことかしら。うちは大新聞社じゃないし、それに女記者には、刑事はなかなか喋ってくれない。なかには、露骨に意地の悪い態度の刑事もいるし」

「経験上、まあ、そういうこともあるだろうなあ」と苦い顔のヒガシ。

「だから、こっちもそういった事情に詳しくてマル暴刑事にも顔の広い先輩に頼んでたんです。何か情報があったら、よろしくって。そうしたら、一昨日、どうも無法松さんを襲撃した犯人が殺されたらしいって」

「ほう」

「いろいろ調べてみたら、例のモガキ二人組のうちの一人らしいの。現在はU組の下っ端の組員らしくて。警察では組同士の抗争か、二人の間でのいざこざが原因と踏んでるようですよ。でも、他の組との抗争なんてなくて、それにもう一人のモガキは行方不明なんですよ」

「すでに殺されてるのか、それとも殺されそうなので逃げたのか。警察の見立てはなんか腑に落ちないな」

「そうでしょう。どうも組内部の問題じゃないかと私は思うんですけど、組の上層部の命令で消されたっていう」

「うーむ、こっちからもすこし探りをいれてみるよ」とヒガシが言った。

ここは横浜の中華街、以前、麻薬取締官のヤマダと会った店だ。

「今日は俺がおごるよ」とヒガシが言った。

「探偵稼業は順調なのかい？」

「探偵は趣味みたいなもんだな。本業は日雇いだよ。いまは何とか食っていけるんだ。ところで、このあいだ言った件だけど、どうなんだ？」

「警察もご多分にもれずタテ割り行政だから、関係者だからってなかなか思った情報が集められないんだよ。いちおう覚醒剤が関係してるってことで知ってる刑事に聞いてみたよ。確実とは言えないかもしれないけれどな……参考の話として伝えておくよ」
「それはしょうがない。で？」
「やっぱり殺されたのはU組の組員のようだな。原因としては、他の組との抗争という線は警察でもなくなっていて、昔、山谷でモガキをやってた頃のうらみ、あるいは組内部のゴタゴタで消されたという線が有力視されてるみたいだ。それ以上はまだわからないそうだ。暴力団の下っ端組員の、元モガキが一人殺されたということだから、これからの警察の捜査の熱意には疑問符がつくだろうな」
　後日、ヤマダから電話があった。
「おい、U組のH組長が拳銃で自殺したぞ」
「えっ」
「いちおう、自殺ということになってるがな。事実かどうかはわからん。殺されたのか、それとも自殺を強いられたのかもしれんよ。H組長は上部のS会からそうとう睨まれてたからな。表向き取り扱い禁止の覚醒剤を大々的に扱っていたし、そちらが追っかけてた……」
「無法松さんが遭遇した覚醒剤……」
「そう、退職警部が横流しした例の覚醒剤の件で、U組どころか上部団体のS会まで警察から厳しい監視を受けるようになったからな。それにさらにまずいのは、これは噂だが、けっこう信憑性があるみたいなんだ。警部から安く買った覚醒剤なんだけど、警察の目をかいくぐってさばくなんて、大きな組織ではないU組には無理。それで、横流しの覚醒剤をさらに横流ししちゃったんだな。それもS会と敵対的関係にある西のある組に」
「うーん、H組長はやばいことに手をだしたんだ。起死回生っていうより、やけくそってやつだな」
「そういうわけ」

　今日は珍しくヒガシ探偵事務所に熊さんが来ていた。もうすぐ夜七時になる。
「遅くなりました」。タカハシ記者が二階の事務所のドアを開けて入って来た。
「いや、七時ぴったりだよ。では早速始めましょうか」とヒガシ。
「こんな結果になって、無法松の無念が晴らせたんでしょうかねえ」。いくぶんか元気のない熊さんの声だった。
「確かに、友人の熊さんとしては納得がいかないのも無理はない。でも『無法松君事件を糾明する会』の役目をある程度は果たせたと思うよ。まるで動こうとしない警察なんかを当てにしないで、自分たちの力で事件の真相を突き止められたんだから」
「でもなあ」と考えて込んでいる熊さん。
「熊さんの気持ちはわかるよ。やられっぱなしの日雇い労働者として何かやりかえせなかったのかっていう。しかし、どうすればよかったのかねえ」

「そうねえ」とタカハシ記者。
「まあ、これからはタカハシさんのジャーナリストに期待だな」とヒガシがタカハシ記者のほうを向いてニヤリとした。
「えーっ、そんなあ……でも力不足だと思うけれど、がんばってみるわ。エヘヘヘ」。そう言って、タカハシ記者が照れ笑いを浮かべた。
「あのー、あいつたちが殺されたり、トンコしたりしなかったら、それで、もし俺たちが二人をとっ捕まえでもしたらどうしたんだろう？」。ここで熊さんがぼそっと言った。
「そいつは難問だな。浅草警察なんて何もせんから、おとなしく警察に差し出すなんて考えられんし」とヒガシ探偵の声も歯切れが悪い。
「じゃあ、ボコボコにして、謝罪文なんか書かせたあと、ぐるぐる巻きに縛って玉姫公園にでも放り出しちゃうのかねえ。それだって、やつらが全然反省なんてしてなくて、心の中でペロッて舌を出してたら……」
「それは、たまらないわねえ。でも私は……」とタカハシ記者。
「俺も暴力は駄目だと思うけど、その場になったら怒ってめちゃくちゃにやっちゃうかもしれない」と熊さん。
「暴力ねえ。でも認めるわけじゃないけど、暴力絶対反対というのもなあ……」とヒガシ探偵がつぶやいた。
「だけど、アメリカの西部劇みたいにやったらいやだわ」
「白い三角頭巾のＫＫＫ（クー・クラックス・クラン）なんてのもあったな」と再びヒガシ。
「そう」
「こういうとき、八つぁんだったらどう思うんだろう？」と熊さん。
「とんでもないことを言ったりしてね。きっとそうよ」とタカハシ記者がここで元気な声を出した。

ここは、いろは会商店街の端にある野田屋。
「熊、そのタイガースの帽子だけどよー、阪神はどうしようもねえなー、このところずっと最下位じゃねえか」
「去年は五位だったぞ」と他の仲間が叫ぶ。
「それ以外はずっと最下位。巨人にぶっちぎりに離されてるじゃねえか。熊、関西人を代表して謝れ」
「やっぱり江夏や田淵がいなくなったからかねえ」
「何言ってんの、そんなの昔」
「昔と言えば、村山、小山だな」。釜ヶ崎だったら殺気立ってくるところだが、なにせここは山谷。なぜか弱い阪神タイガースの話になると盛り上がる。酒の肴にはぴったりのようである。ここで、熊さんが赤シャツや坊主頭などの仲間に対して話し始めた。いつもの訥々とした話しぶりではなかった。

「このタイガースの帽子は無法松の遺品なの。そこで、みんなに報告があるんだ」
「おっ、構えちゃって、熊らしくないぞ」と赤シャツが茶化す。
「無法松をやったモガキ二人組の一方が殺された。何かでボコボコに殴られて道に倒れてたそうだ」
「えーっ」「悪いことってできねえな」「で、誰にやられた？」「人相から言ったら坊主頭、お前がやったんだろう？」「馬鹿言うない、俺は暴力は嫌い」「しかし、やられたモガキの奴だって今頃、閻魔大王の前で縮こまっていて、地獄行きを言われてんだな。おー、いやだいやだ」。みんながガヤガヤとするなかを、再び、熊が喋り始めた。
「もう一方も行方不明だそうだ」
「どっかの海で土左衛門になってたりして。そんな死に方はいやだな」と赤シャツが言った。
「じゃあ、山谷の日雇い労働者としてのお前はどういう死に方がいいんだよ」。向こうのほうから声が飛んできた。
「なんだと」。その声のしたほうを睨む赤シャツ。
「おいおい、そんなことでの喧嘩はなしだぜ」と熊さんが仲裁の声をかける。「そいつは、どうも組からトンコしたらしいんだ。だからU組内部のごたごたがあったんだろうなあ」
「というと、組の都合で一方は殺され、もう一方は殺されちゃたまんないってトンコしたのかい？」と坊主頭。
「その線だろうなあ」と熊さんがうなずく。「なぜかっていうと、そのU組のH組長ってのが拳銃自殺しちゃったんだってよ。殺されたって線もあるそうだけど」
「へーっ」。熊さんの言葉を聞いて、みんなの気分はさらに一段とヒートアップした。「もうほとんどテレビの世界だな」「事実は小説より奇なり、か」「こいつ、一人でかっこつけやがって」
「だけど、これで無法松の無念は晴れたのかな？」と熊さんがぽつりとつぶやいた。
「そうよなあ。だけど、とりあえず犯人とその動機ってのか、それはわかったじゃないか」と赤シャツが言った。
「確かに。実行犯のモガキの一人は殺され、もう一人はトンコ。命令した主犯の組長は自殺しちゃったんだしな。それに、たとえ俺らがモガキ二人を捕まえて、警察に差し出したってどうせ警察なんか何もせんよ」
「だけど、せめて二人を二、三発くらいどつきたかったな」と坊主頭。
「二、三発ですむかなあ」と赤シャツ。それにつれられて、みんなが笑った。

一九九一年二月異常ともいえる加熱した経済が崩壊した。そして数年がたった。八つぁんと熊さんが山谷の路上で缶チューハイを呑んでいる。最近はいっしょに仕事をする機会もなく、二人にとって久方ぶりの酒盛りだった。
「パレスも空いてるね。ひどい景気だからなあ」と目の前に建っている大きなドヤのパレスハウスを見ながら八つぁんが言った。「改装して一階は生活保護なんかの福祉関係の者が入

ってるんだ。要するに、金が確実に入るからね。四階の個室は仕事も直行とか、ある程度つかんでる古い人が入ってるね。つながりがある人は何とかなるけれど、職安なんかからの仕事だけじゃしんどい、フリーでは食っていけない。以前は職安の仕事でメシが食えたけど、いまは無理じゃないの」

「あのー、八つぁん、ご隠居の様子はどうなの？　この前、家賃を持ってったときは具合が悪そうで話をするのもしんどそうだったから、長居はやめて家賃を置いてすぐに帰っちゃったんだ」

「まあ、何とか生きてるから大丈夫だ。季節の変わり目で調子をくるわしたんだな、きっと。いまじゃあ、控えてたお酒、例のぬる燗ね、それをちびちびやってるよ」

「そうかい、そいつは安心した」とすこしほっとした熊さんの顔。「この頃、みんな、山谷からいなくなったりで。赤シャツも坊主頭も姿を見かけないよ」

「そういえばそうだなあ。ところで、熊のガールフレンドのサチくんはどうしてんだい？」

「あの娘（こ）は結婚したよ」

「えーっ、そいつはまったく残念無念。で、相手は例の暴走族のにいちゃんかい？」

「別の男みたいだよ」とそっけない熊さんの返事。「結婚っていったって一緒に暮らしてるだけみたいだけど」

「ふーん、そうかい。タカハシユウコ記者は新聞社でがんばってるみたいだぞ。署名入りの記事が載ってるって、ご隠居が言ってたな。あっ、熊、署名ってわかるか、名前入りのことだぞ」

「ちぇっ、そんなのわかってるよ」

「で、ご隠居は毎日、散歩の帰りに駅まで新聞を買いに行くらしいんだ。でもタカハシさんの記事はたまになんだってさ」

「ヒガシ探偵は？」

「俺らと同じで、日雇いの仕事は減っちゃって。ただ探偵さんの仕事がたまにくるらしい。『浮気とか素行調査ばかりで、嫌になっちゃうよ』ってぼやいてたけど。『サチくんの家出捜査が懐かしい』ってさ」

「でも、何とか食っていければねえ」

「お互いにな。ひどい時代になっちゃったからなあ」。ここで、八つぁんらしくもなくため息をついた。

（二〇二三年一一月了）